

プレイバック!!

著名人が語った 「尊厳ある死」

1976年の協会設立直後から年4回発行してきた会報も、次号で50年、200号を迎えます。その節目に向けて、今号と次号の2回にわたって、著名人が語った「尊厳ある死」のうちから「もう1度読みたい」との声が多かったインタビューを厳選し、その抄録をお届けします。1回目は柳田邦男さんと鮫島有美子さん。「さよならも言えない別れ」と「両親の看取りのリアル」が胸に迫ります。

(インタビュアー・構成/会報編集・郡司 武 写真/水村 孝)



柳田邦男さん

「ノンフィクション作家」

(会報184号〜2022年1月発行)から抄録

「さよならのない別れ」を どう生き直すのか



——柳田さんはこの春、コロナ禍の中の「特異な別れ」をテーマとした「さよならのない別れ」というような内容の本を出版されます。この本の刊行は、どういう思いからでしたか。

柳田 直接的には、2020年の3月末に、喜劇役者の志村けんさんが亡くなられたことです。遺骨を抱いてお兄さまが自宅に帰られ、メディアに囲まれて「コロナで急に入院し、最期の別れもできなかった」と言葉少なに語ったんですね。「霊安室で棺に納める時も火葬場でも立ち会えなかった」と。それを見て、はっと気づかされたんです。人間にとって、人生の最期、この世での最期に、大事な家族や愛する人たちと別れの言葉を交わすことができない、象徴的に言えば、さよならと言えない…。そういう別れが突然、日常の中に降って湧いたように起こる。これは大変な問題だ、と思ったんです。

「看取りさえもできない別れ」

——コロナ禍による死は尋常な死ではない、と直感されたわけですね。

柳田 これまで、がんでの死などに向き合ってきましたが、これはじわ

じわと近づいてくる死でした。本人も家族も、あらかじめ考えながら「その時」を迎える。しかしコロナでの死は全く様相が違う。すぐに専門病棟に隔離され、面会も付き添いもできない、看取りさえもできない、別れの言葉もかけられない、お互いさまよならのメッセージも交換できない、そういう状況なんですね、コロナの初期の頃は。

——手を取り合ってたか頬を撫でるとかはできないですね。

柳田 欧米でもそうでした。イタリアでも医療崩壊が起こり、病院で亡くなるとロッカーの中に遺骨が入られて、それが「再会する」最初の場であって、そのロッカーに泣きすがっている女性の映像をテレビで見ました。要するに、コロナでは、人間のコミュニケーションの基本である「対面」や「接触」が規制されてしまう。きわめて特異なことなんですね。

——柳田さんは以前から、「人は物語を生きている」と言われています。そして、「その物語の最終章は自分で書く」ことを勧めています。つまり、最後は意志的に生き抜くということの重要性を説いているわけですか。

が、コロナは、その人それぞれの物語を突如として断ち切ってしまうということになるわけですね。

柳田 「最終章を自分で書けない」ということは人間の尊厳が損なわれるということですよ。

——物語が切断される死、と言えば、1985年の日航機事故もそうでしたよね。一瞬で520人が亡くなりました。

柳田 日航機事故で、9歳のけんちゃんというお子さんを亡くされた美谷島邦子さんは、「甲子園野球を見に行きたい」という野球好きの息子の夢を叶えてあげようと一人旅をさせました。母親としては「なんで付き添ってあげなかったのか」を悔やみ、羽田空港で見送りはしただけ、ほんとの意味の「さまよならのない別れ」にやり場のない喪失感に襲われたのです。

歳月を経て、美谷島さんは、あるきっかけで、けんちゃんは行方不明になったのではなく、自分の中にいると気付くんです。「ぼくはここにいう言葉が聞こえてくる。これは、人が「喪失」から立ち直っていくうえで決定的なくらい重要な意味を持



『最終章を自分で書けない』 ということとは人間の尊厳が 損なわれるということ

つんですね。精神性の命を見出していく作業——これが癒しの本質的なことであり、混んとしてどう生きていけばわからないような中から抜け出していく大事な節目になるんですね。

——レジリエンス、つまり生き直すということですね。

柳田 自分自身が再生する力というのは、自分自身が生まれ育った中で染み込んだものではないかと思うんです。それが核になる。特に親がど

ういう局面の中でどう生きてきたのか、どう気持ちを切り替えていったのか、それを見つつ形成されていくと思います。

私についていえば、母親です。私が10歳の時に父が亡くなり、その半年前に兄が亡くなりました。終戦直後の結核最盛期で、母は40歳でした。子どもも多く、私が一番下でした。それでもパニックにならず鬱に

もならず。栃木県の方言で「なんとかなるべさ」とか「しかたなかんべさ」というんです。これは、運命とか宿命というのは逆らえない面があるから、ジタバタしても仕方ないということですね。ジタバタすれば、かえって負を背負ってしま

う。運命を受け入れる。これが「しかたなかんべさ」なんですね。決して放棄することではない。ありのま

まを受け入れて、自分と家族の将来に対してきちんと向きあう。まさにレジリエンスそのものなんです。

私の場合、次男が25歳で自死したショックは大きかったし、今でも引きずっているものがたくさんありますが、母の生き方が、気がつけば私の心の版型になっていて、自分も息子の死を息子の生の文脈で受け止めて生きてきた、と言っているのかな。

「そうでなければならぬ ならば、の意味も」

——ところで「さようなら」ですが、非常に意味の深い言葉であると、柳田さんは書かれていますね。

柳田 この語意は「さようであるならば」なんです。もう一つ、「そうでなければならぬならば」という意味もあるんです。いろんな別れがあります。これまでの人生と何らかの理由で別れ、次の新しい人生に入らなければならぬ場合があります。死別とかですね。そういう場合に「帰ってきて」とか「命を返して」とか叫ぶだけではなく、人間の力ではどうしようもない力で切断された状況を、「そうでなければならぬならば」と一つの節目としてとらえる。これからの人生は自分で作っていくかなければならない、という意味を含んでいるんですね。先ほどの「人生の最終章を自分で書く」ことに通じます。

——さようなら、は節目の言葉であるわけですね。

柳田 あるところで節目をつけて新しい人生を歩む、その「接続詞」が「さようなら」なんです。ですから、「さよなら」は「別れ」というのは、とても辛いものなんです。であると同時に、さよならがない別れの場合、これからどうすればいいのか、どう生きていけばいいのか、今、新しい課題になってきているのです。

あるところで節目をつけて 新しい人生を歩む、 その『接続詞』が『さようなら』



やなぎだ・くにお

1936年、栃木県生まれ。ノンフィクション作家。東大経済学部を卒業後、60年にNHKに入り、全日空羽田沖墜落事故やBOAC機空中分解事故などを取材。71年、これらの事故を追ったルポルタージュ『マッハの恐怖』で大宅壮一ノンフィクション賞。74年にNHKを退職し、以降、航空評論家として活躍。95年、次男が自死した体験を綴った『犠牲—わが息子・脳死の11日』を発表。この年、ノンフィクション・ジャンルの確立への貢献で菊池寛賞。以降、事故や災害、生と死、終末期医療など、現代における「いのちの危機」をテーマに書き続けている。著書に『空白の天気図』『がん回廊の朝』『脳治療革命の朝』など多数。

